HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マタイ福音書の奇跡物語
Author(s)	池永, 倫明
Citation	基督教学, 4, 69-72
Issue Date	1969-07-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46239
Type	journal article
File Information	4_69-72.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

マタイ福音書の奇蹟物語

池永倫明

序論

マタイ福音書の奇蹟物語を解釈する際、奇蹟物語の伝承をまとめて現存のように配列した編集者の神学的意図も問題となる。編集者は伝承の内容に変更を加えずに、その内容を可能な限り効果的に伝達しようと努力したにちがいない。編集者の神学的特異性が現われる所は編集の枠づけの部分であり、枠になるものとしては、伝承された記事の前後につく、導入句と結尾句であるが、更に伝承の構成の変更、説明語の付加、省略、記述の定型化等も枠とみなされる。

マタイ福音書の成立について、困難な問題が未解決のまま残されているが、一応マルコ福音書成立後の七十年以降、マルコを用いつつ、QとMを加え、更にペテロに関するようなM特殊資料をも加えて現存のマタイ福音書を編集したのであると考えたい。編者はユダヤ人キリスト者であり、ユダヤ教より改心したラビ達の共同編集であったと推定したい。クムラン教団が一つの学派を形成して、規律書の作成やハバクク書の註解等を共同作業としてなしたように、初代教会においてマタイ学派ともいうべきグループの存在が考えられるのである。[2] とにかく、マタイ福音書編集者はパウロ主義者でもヤコブ主義者でもなく、律法を重んじる異邦の教会と関係をもつユダヤ人キリスト者達であったろう。編集者の目的はキリスト教がユダヤ教を真に成就するものであることを示すことにある。キリスト者こそ真のイスラエルであり、神

殿に代って、神の教会をたて、主イエスの教えはモーセの教えを成就するより高い律法であることを示そうとする。

方法と結論

マタイとマルコの奇蹟物語の平行記事の比較を試みた。Kurt Aland の Synopsis を用いて、平行記事内における両者に共通な語、マタイが省略している語、マタイに特有な語を抽出した。比較した箇所は以下の十六箇所である。「らい病人のいやし (Mt 8 : 1-4)」、「カペナウムの百卒長 (Mt 8 : 5-13)」、「ペテロのしうとめのいやし (Mt 8 : 14-15)」、「海上の嵐 (Mt 8 : 18, 23-27)」、「悪霊追放 (Mt 8 : 28-34)」、「中風の者のいやし (Mt 9 : 1-8)」、「長血の女、会堂司の娘 (Mt 9 : 18-26)」、「二人の盲人のいやし (9 : 27-31)」、「悪霊につかれたおし (Mt 12 : 22-24)」、「安息日のいやし (Mt 12 : 9-14)」、「施食の奇蹟 (Mt 14 : 13-21)」、「海上歩行 (Mt 14 : 22-33)」、「カナンの女のいやし (Mt 15 : 21-28)」、「施食の奇蹟 (Mt 15 : 32-39)」、「てんかんの子のいやし (Mt 17 : 14-21)」、「エリコの盲人のいやし (Mt 20 : 29-34)」。ただし、「カペナウムの百卒長」はルカと比較した。

以上の箇所の比較によっていくつかの顕著な差異を見出し得た。筆者は Held[1] 等の方法により追試し、彼等とほぼ同じ結論に達した。主要な点を要約すると、①定型化。「A がイエスのもとに来た」。「A がイエスのもとに来て、言った」。「A がイエスのもとに来て、ひれ伏した」。こうした定型的な導入が目立っている。「来た」という動詞もマタイでは一種類の動詞を定型的に用いる。こうした傾向はいくつかの動詞でみられる。「拝する」、「見られた」、「手を置かれた」、「いやされた」という動作も定型的に用いられ、感情や、周囲の状況の説明を排して、客観的な描写がなされる。一例をとってみると、マタイ 8 : 14-15 は次のように注意深く定型化されている。

14
καὶ ἐλθὼν ὁ Ἰησοῦς εἰς τὴν οἰκίαν Πέτρου
εἶδεν τὴν πενθερὰν αὐτοῦ
βεβλημένην καὶ πυρέσσουσαν.

15
καὶ ἥψατο τῆς χειρὸς αὐτῆς,
καὶ ἀφῆκεν αὐτὴν ὁ πυρετός.
καὶ ἠγέρθη καὶ διηκόνει αὐτῷ.

ここでは、ヤコブもヨハネも登場せず、人々の仲介もなく、イエスがペテロの家に入り、相手をごらんになり、手にさわり、熱が引いたことが定型的に記述されている。Held はマタイの奇蹟物語にみられる定型的表現の理由として、中核的出来事を読者に有効に示すためだと解釈している。[1] この定型化により読者は中心的メッセージに直面させられ、イエスと奇蹟の対象人物が明瞭になり、そこで起る奇蹟の出来事に照明があてられるのである。

②語の省略。奇蹟物語に用いられた語数を比較してみると3対4の比になり、マタイの方が少ない。内容には変更が加えられていないとすると、マタイはどういう語を省略しているのであろうか。主として、周辺的な状景、脇役的人物、弟子達は省略される。弟子達が登場する時は弟子そのものの信仰が問題とされている。Held はマタイの奇蹟物語における対話の位置を重視しているが、マタイでは奇蹟物語の対話は決して省略されることなく、対話を通してメッセージを告げようとしている。例えば、中風の者のいやしにおいてマタイはマルコにある天井に穴をあける記述を省略して、イエスと人々との対話、論争を目立たせ、罪の赦しの全権を主イエスとしっかり結びつけようとする。対話における中心的な語もほぼきまっており、「救って下さい」、「行け」、「信ぜよ」、「権威」のような語が対話の結び目になっている。これらの語によって、懇願、イエスの命令、奇蹟の出来事が起るのである。ここから、マタイ編集者の神学がうかがえる。すなわち、先ず懇願する信仰者が主イエスの前に立ち、彼の懇願は主イエスによって奇蹟的にかなえられるのである。

以上、定型化と省略化を通してマタイ奇蹟物語はいくつかの特異な様相を見せるのであるが、次に弟子達の問題にふれてみたい。

マタイ奇蹟物語において、弟子達が奇蹟的な行為をしていないことは注目に価する。ペテロの海上歩行にしても、彼の無能が告げられている。信仰の約束は弟子でないらい病人、異邦人、足なえ、長血の女に向ってなされ、彼等は信仰の模範者として登場している。それに反して弟子達は常に彼等の不信仰が問題とされる。[1] マタイにおいて、「不信仰な者達」は四回用いられ、マルコには用

いられていない。マタイ福音書編集者が旧約の伝統を受継ぐラビのグループとするなら、不信仰の問題は旧約聖書を貫く選民の不信仰と重なった問題意識として提出されるであろう。神に愛され、召されたイスラエルの民も神への不信頼におちいった。旧約の成就者としての主イエスが弟子を召し、教会をたてておられる故に、信仰の薄い人間存在とは弟子として受入れられた者が、不信仰におちいることなのである。一例を上げると、「てんかんの子のいやし」でマタイ(17：14-21)とマルコ(9：14-29)を比較すると、共通部分は「彼等が帰るとひとりの人がイエスに近寄ってきた。『あなたの弟子のところへ……』イエスは答えて言われた、『ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におれようか。いつまであなたがたに我慢ができようか。その子をここに、わたしのところに連れてきなさい』。……」。ここで、主イエスの嘆きの言葉はマタイにおいては、子供をいやしえない弟子の無能力さ、すなわち、不信仰に向けられているように受取れる。マルコにおいては、弟子達に向けられた言葉かどうか判断できない。マタイの方では、てんかんの子供をいやしえない弟子の信仰に問題の焦点をあてているようにみえる。

マタイ福音書奇蹟物語を検討することによって、最初の伝承を受取り、解釈した編集者の神学について一つの手がかりが与えられる。そして、この手がかりは、福音書全体の宣教の中で再吟味されねばならない。

主要文献

(1) G. Bornkamm-G. Barth-H. J. Held: Überlieferung und Auslegung im Matthäusevangelium (1960).

(2) K. Stendahl: The School of St. Matthew (1954).

(3) G. D. Kilpatrick: The Origins of the Gospel according to St. Matthew (1946).

(4) Kurt Aland: Synopsis Quattuor Evangeliorum (1963).

(5) R. Morgenthaler: Statistik des neutestamentlichen Wortschatzes (1958).